

「青空の下で」

兵庫県 窪田千恵

高2の夏、青春まっさかり。私は1日のほとんどを、真っ青な空の下、入道雲に見守られながら過ごす。水泳部の季節が始まった。

水しぶきを立てながら、黒光りする身体で水面を突き破る。水面の波が太陽の光でキラキラと輝き、水の中は太陽の光でいっぱい。潜ると幻想的な世界が広がる。黒々と焼けた私たちにとって、太陽は敵ではない。時に虹を見せてくれ、夕暮れには茜色に空を染め、私たちを包み込む。すっかり太陽には気を許している。それを知ってか知らずか、太陽はプールの真上でニカーッと笑いながら容赦なく照りつけてくる。

そんな中で今日も練習がはじまる。

「気をつけっ！礼っ！」「おねがいしまーす！！」

私たちの練習は、泳ぐこと。必死で泳ぐ。ひたすら泳ぐ。まだまだ泳ぐ。苦しい。でも泳ぐ。

ある日のタイムトライアル。ここ8ヵ月間、思うようなタイムが出ていなかった私。大会でもないのに緊張した。

ヨーイ。ピッ

(死ぬ気で！！死ぬ気で泳げ自分！！となりに負けるなー！！)

そんなことを考えながら100mを泳ぎきった。先生の口が開き、聞こえたタイムは…ベスト。8ヵ月ぶりの大ベストタイムだった。一気にからだの力が抜け、水に顔をうずめる。水の中なら、涙は見えない。

タイムトライアルの日は格別つかれる。だが当然のように次の日も朝から練習だ。みんな文句たらたらである。「まじ明日も練習とかありえねー！！」「ほんまなあ！！」そんなに文句を言うのなら、来なければいいんだよな、と自分で思う。でもきっと明日になれば、気づけばプールの中にいるだろう。自分たちが思っている以上に、この黒い集団は水泳が好きで、プールが好きで、空と太陽が好きで、仲間が好きだ。

翌朝8時。今日も吸いこまれそうな青空だ。

「気をつけっ！礼っ！」「おねがいしまーすっ！！」

私の1番好きな時間がまた、始まる。